

令和元年6月12日現在

機関番号：24301

研究種目：基盤研究(C) (一般)

研究期間：2016～2018

課題番号：16K02246

研究課題名(和文) 歌舞伎囃子に関する劇書・伝書の研究

研究課題名(英文) A Study of Gekisho (books on kabuki theatre) and Densho (books passed down for generations) about Kabuki Music

研究代表者

前島 美保 (MAESHIMA, MIHO)

京都市立芸術大学・日本伝統音楽研究センター・客員研究員

研究者番号：40436697

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 2,400,000円

研究成果の概要(和文)：本研究では、近世および近代の歌舞伎囃子を今に伝える劇書と伝書という二つの史料群を収集・調査し、歌舞伎囃子関連箇所を重点的に精読・翻刻することで、既出史料の見直しと新出史料の検討を行った。最終的に解題と翻刻を収載した報告書(『歌舞伎囃子に関する劇書・伝書の研究 解題・翻刻』)として出版・公開し、歌舞伎囃子の史料研究の基盤を整備・確立することを目指した。

研究成果の学術的意義や社会的意義

『芝居囃子日記』の最善本と考えられる町田本を確認できたこと、これまで十分に紹介されてこなかった『演劇拍子記』、『三芝居楽屋雑書』、『新梓 猿若年代記』を精査できたこと、当初の予定より幅広く関連史料を発掘することができたことは、歌舞伎囃子の歴史的展開を考える上で大きな収穫だったものと思われる。収集した各史料の成立背景や影響関係、記載内容の吟味等については、今後も継続的に検討を重ねてゆきたい。

研究成果の概要(英文)：Starting from the collection of source material written in gekisho and densho which handed down kabuki music in the pre-modern and the modern era, the descriptions on kabuki music in these books were investigated and reprinted. Some already known materials were also re-examined.

The investigation and the republication of the description on kabuki music in these books provided a new fundamental research base in the study on pre-modern Japanese music or kabuki theatre. There are still some questions regarding the background of the formation of each material and the relationship between each other, which merit further research.

研究分野：日本音楽史

キーワード：歌舞伎囃子 歌舞伎音楽 近世 近代 史料研究 狂言作者 伝書 劇書

1. 研究開始当初の背景

歌舞伎と共に展開した歌舞伎囃子は、四百余年の歴史を有す。中には十数代を数える囃子方の名跡が今なお存在しており、その間の長い歴史と芸の伝承を端的に物語っている。歌舞伎囃子の過去の音楽実態、とりわけ江戸時代のそれを伝える史料には、大きく次の四つが考えられる。すなわち劇書、台帳、囃子付帳、伝書であるが、従来、主にこれらの史料の発掘・整理・翻刻を中心に調査研究が進められてきた。たとえば劇書・伝書については、戦前より『新群書類従』には西沢一鳳軒『伝奇作書』などを載せるほか、戦後も六代目田中伝左衛門の伝書『芝居囃子日記』等を含む『日本庶民文化史料集成』第6巻歌舞伎や、『戯場訓蒙図彙』等の劇書の影印・翻刻を載せた国立劇場芸能調査室編「歌舞伎の文献」シリーズなどが出され、江戸期の歌舞伎囃子の概要を知る基礎史料の整備および検討はひとまず十分であるかに思われた。

ところが、改めて『日本庶民文化史料集成』所収の『芝居囃子日記』を読み込むと、いささか意味の通らない箇所が散見され、とくに歌舞伎囃子と関わりの深い音楽関連用語において顕著であった。改めて底本や最善本による確認が必要となってきた。またインターネット等による研究環境の変化が、これまで知られなかった関連史料へのアクセスを容易にしている状況も見逃すことができない。こうした新出史料の発見は、個々の史料的価値はもとより、既知の諸史料との関係まで話が及ぶ可能性が高く、結果として既出史料の再考にもつながるだろう。以上の経緯から、歌舞伎囃子関連の基礎史料(今回は劇書と伝書)を今一度再確認し、新出史料の検討を踏まえて整理・位置づけることが最重要と考えるに至った。

2. 研究の目的

本研究は近世および近代の歌舞伎囃子を今に伝える劇書と伝書という二つの史料群を調査・収集し、既出史料の見直しと新出史料の検討を通じて、歌舞伎囃子の史料研究の基盤を整備・確立することを目的とする。収集した重要史料は、歌舞伎囃子関連箇所を重点的に精読・翻刻し、最終的に解題と翻刻を収載した報告書として出版・公開する。本研究を通して、近世後期から明治期にかけての歌舞伎囃子の歴史的展開を見定め、具体的に跡付けた上で、歌舞伎音楽史や日本音楽史の再考へとつなげてゆきたい。

3. 研究の方法

本研究は史料研究を主軸とする。そのため、まず「日本古典籍総合目録データベース」(国文学研究資料館)や『日本古典音楽文献解題』、各機関の検索サイト等を通じ、劇書・伝書の伝本を調査し、紙焼や画像データ等で収集した。その上で定期的に研究会を開催し、歌舞伎囃子関連箇所につき翻刻・精読を繰り返して行った。また、雑誌、書籍等にて活字翻刻があるものについても、今回積極的に調査・収集した。具体的には、『芝居囃子日記』諸本(平成28年度)、『演劇拍子記』と関連史料(平成29年度)、『三芝居楽屋雑書』「新梓 猿若年代記」と関連史料(平成30年度)に焦点を絞って研究を進めた。なお、『芝居囃子日記』については、西山松之助による『日本庶民文化史料集成』の諸本系譜を増補改訂しながら検討した。

4. 研究成果

(1) 『芝居囃子日記』諸本

六代目田中伝左衛門(～1853(嘉永6年))筆の『芝居囃子日記』(原本)がいつ頃失われたかは定かでない。慶応2年(1866)3月に三代目杵屋勘五郎(1815～1877)が筆写し(杵屋本、戦災で失)その後勘五郎の手を離れ、初代稀音家浄観(1839～1917)に譲渡された。これを折しも町田佳声(1888～1981)が借り出していたことから関東大震災による焼失を免れ、「今後の変に備えん為」と模写したものが、町田佳声旧蔵本である。この町田本が、今回東京文化財研究所に所蔵されていることがわかった。また、『日本庶民文化史料集成』の諸本系譜にある黒木本(黒木勘蔵筆)と高野本(高野辰之筆)について旧蔵機関に照会したところ、現存を確認することができなかった。西山本(西山松之助筆)は確認していないが、諸本の現況調査から、『芝居囃子日記』の最善本は町田本と考えられる。

なお、失われた各諸本は雑誌等への活字翻刻により、その存在を窺い知ることができる。小寺本(小寺融吉筆)は『今昔』(昭和8年(1933)9月～11月) 杵屋本は『長唄』(昭和8年11月～昭和9年6月、部分) 渥美本(渥美清太郎筆)は『演劇と舞踊の図解』第四編(昭和15年9月)に翻刻が掲載されている。また早くに、関根只誠(1825～1893)により「戯場年表」拾九や「歌舞伎道成寺考」等に『芝居囃子日記』が部分引用されているが、町田本にはない記述が散見されることから、あるいは原本の逸文かとも考えられるが詳細は不明である。

報告書には、『芝居囃子日記』諸本の解題と、町田本の書誌および翻刻を掲載し、『日本庶民文化史料集成』(西山本を底本とする)との校異を示した。

(2) 『演劇拍子記』と関連史料

『演劇拍子記』は早稲田大学演劇博物館が所蔵する一冊の写本である。筆写奥書から明治40年(1907)春、六郷(六合)新三郎(1859~1927)により写し取られたものと知られる。巻頭「序詞」には「慶応四ノ年弥生 四世桜田劇文堂主人 劇書」の署名があり、本文末尾にも「四世柳井隣 桜田蔵」と記される。「柳井隣」は初代桜田治助(1734~1806)の号とされることから、本史料の背景には四世桜田治助の存在を窺わせる。本文の内容は、歌舞伎の黒御簾で使う囃子名目(曲名)が列挙され、それぞれに用法や使用楽器の説明などを施したものである。この種の記載は江戸期の劇書や狂言作者の覚書にも見られるものだが、本史料の特徴は三段の体裁をとって、基本的に中段に囃子名目、下段に用法や楽器の説明、上段に注記と分けて記している点で、とりわけ囃子の用法や口伝について新三郎独自の視点で詳細に記述(多くは朱筆)していることは注目される。「宮神楽」「岩戸神楽」に始まって、241項目が列挙される。

『演劇拍子記』の書名から想起されるのは、三世桜田治助(1802~1877)著として知られる『拍子記』である。原本未詳であるが、川尻清潭が『演芸画報』昭和15年7月号に「芝居なんでも帳(一)」として翻刻・紹介し、のちに『芝居おぼえ帳(歌舞伎資料選書2)』として出版されたものが広く知られる。また望月太意之助『歌舞伎の下座音楽』にも「拍子記」(文久2年)として翻刻(部分)されているほか、伊原青々園筆写による『拍子記・笏記・五柳随筆』(早稲田大学演劇博物館蔵)の存在も今回知ることができた。これらの「拍子記」類には、「天王立」から始まって、約120項目が列挙され、その順番や説明内容にも共通する点が見受けられる。『演劇拍子記』と比べると、囃子名目の数や順番の違いは顕著だが、囃子名目の記載内容には類似性が認められる箇所もある。もう一つ関連史料と考えられるのが、川尻清潭が「芝居なんでも帳(二)」(『演芸画報』昭和15年9月号)に紹介した『美都拍子』である。『美都拍子』は囃子名目が226項目と多く、「宮神楽」から始まる順番も『演劇拍子記』と共通性が見られ、さらには「序詞」も酷似している。

以上より、『演劇拍子記』は「拍子記」類よりもむしろ『美都拍子』と近い関係にあると考えられる。なお報告書には、『演劇拍子記』の解題と翻刻、ならびに『演劇拍子記』・「拍子記」類・『美都拍子』の囃子名目一覧を付した。

(3) 『三芝居楽屋雑書』「新梓 猿若年代記」と関連史料

国立国会図書館に『三芝居楽屋雑書』という書名の写本が二冊存在する(甲本、乙本)。甲本は外題・内題に「三芝居楽屋雑書」、奥書に「天保六未年仲夏書写之 八橋堂」とあり、天保6年(1835)5月に八橋堂が筆写したものとわかる。内容は「三芝居年中行事」「稽古の次第」「年代記」「古来囃子外座附名目大略」「中古達人唄三弦囃子方名目」等から成り、一部ルビに朱筆の書き込みが見られる。乙本は渋江家旧蔵本と知られる一本で、外題はなく、内題に「三芝居楽屋雑書」、奥書に「八橋主人著 終」とある。項目は甲本に類似するが、書写内容から乙本は甲本(あるいはその類本)の転写本である可能性が高い。

また以上二冊とは別に、「改正 役者年曆珍重記/新板 三芝居楽屋雑書」という両面一枚刷が存在する(個人蔵他)。内容は甲本に酷似するが、一部に異同が確認され、奥書の代わりに「並木舎校」とある。西沢一鳳軒『伝奇作書』によれば、この作者は瀬川如臯とするが、その根拠は不明である。なおこれらの内容は、三升屋三治(1784~1856)の『賀久屋寿々免』との共通部分を見出すこともできる。

一方、「新梓 猿若年代記」(架蔵他)も一枚刷のもので、成立は安政5年(1858)と知られる。作者は幕末から明治初期の戯作者・傭書家山関人交来(1819~1882)、『三芝居楽屋雑書』や「改正 役者年曆珍重記/新板 三芝居楽屋雑書」と同じ項目が列挙され、場合によっては内容が増補されている。

以上言及した各史料には、相互に関連が見られ、狂言作者や芝居関係者らが共有していた知識の蓄積を垣間見ることができる。ただし各史料の影響関係等の詳細な検討は今後の課題として残った。なお報告書には、『三芝居楽屋雑書』と「新梓 猿若年代記」の解題と該当箇所の翻刻を記した。

(1)~(3)の各史料の検討を経て、最後に本研究全体を総括する必要があったが、翻刻作業等で手一杯となってしまった。もっとも『芝居囃子日記』の町田本を確認できたこと、これまで十分に紹介されてこなかった『演劇拍子記』『三芝居楽屋雑書』『新梓 猿若年代記』を精査できたこと、当初の予定より幅広く関連史料を発掘することができたことは大きな収穫だったものと思われる。各史料の成立背景や影響関係、記載内容の吟味等については、今後も継続的に検討を重ねてゆきたい。

5. 主な発表論文等

[雑誌論文](計1件)

前島 美保、「江戸中期上方歌舞伎の囃子名目とその用法 『歌舞伎台帳集成』および劇書を手がかりに」、『東京藝術大学音楽学部紀要』、第44集、2019年、1~16頁、査読有

[学会発表](計3件)

Miho, Maeshima, "Sumo and Kabuki in Early Modern and Modern Period", *Japan*

Studies Association, 2018

前島 美保・鎌田 紗弓・土田 牧子、『演劇拍子記』をめぐって』、平成 29 年度歌舞伎学会秋季大会、2017 年

前島 美保・土田 牧子・鎌田 紗弓・木岡 史明、『芝居囃子日記』再検』、東洋音楽学会第 67 回大会、2016 年

〔図書〕(計 1 件)

歌舞伎囃子に関する劇書・伝書研究会(前島 美保・土田 牧子・鎌田 紗弓・木岡 史明)編、『歌舞伎囃子に関する劇書・伝書の研究 解題・翻刻』、田中プリント、2019 年、81 頁

6. 研究組織

(1) 研究分担者

研究分担者氏名：土田 牧子

ローマ字氏名：(TSUCHIDA, Makiko)

所属研究機関名：共立女子大学

部局名：文芸学部

職名：准教授

研究者番号(8桁)：30466958

(2) 研究協力者

研究協力者氏名：鎌田 紗弓

ローマ字氏名：(KAMATA, Sayumi)

研究協力者氏名：木岡 史明

ローマ字氏名：(KIOKA, Fumiaki)

科研費による研究は、研究者の自覚と責任において実施するものです。そのため、研究の実施や研究成果の公表等については、国の要請等に基づくものではなく、その研究成果に関する見解や責任は、研究者個人に帰属されます。